

GLA 隨想 5 実現に向けての第一歩を

GLA を憂う元会員

2013 年 4 月 8 日 第 1 版

目次

1	はじめに	1
2	先生の御旨を我が旨とする	2
3	押し上げる力の結集	4
4	引き上げる力との響動	6

1 はじめに

これまで発表させて頂いたレポート GLA 隨想 1～4 では、「グループ力・響
働力に基づくお世話構造」および「7つのプログラム」に関して様々なご提案
をさせて頂きました。これらのご提案については、会員の皆様の間で様々意見
交換をして頂き、実現して頂きたいと思いますが、最初に何から始めて頂くべきか
ということを考えてみたいと思います。

最初に実現して頂くことが呼びかけられているテーマは、おそらく、通信
ネットワーク環境の整備に関する、次のテーマではないかと考えます。

**「高齢者や病気の方など四聖日などの場に足を運んで頂くことが困難な
方々については、自宅等への映像配信システムを活用して、自宅等にて
集いに参加して頂けるようにする」**

このテーマを優先して頂きたいと考える第一の理由は、映像配信を必要とさ
れる方々の中には、人生の時間があまり残されていない方々が多いということ
です。そして、第二の理由は、このテーマについては内容についてあまり議論
することがなく、会員の皆様の意見を一つに集約しやすいと思われるためで
す。つまり、「映像を配信する」という方向で意見がまとまれば、配信される
映像は、「中継会場に配信される映像と同一の映像」ということ以外に考え
くいいためです。

このテーマを如何に実現してゆくか、そして他のテーマに対する挑戦に如何
につなげてゆくかを次節以降で検討してゆきます。

2 先生の御旨を我が旨とする

GLA 誌 2006 年 6 月号の p36~37 には、次の枠内の記事が掲載されていました。この記事は「映像配信システム」について直接触れたものではありませんが、この記事から高橋佳子先生の御心を感じて頂ければ、先生が映像配信システムを何のために構築されたのか、心に落として頂くことができると思います。なお、文中の会員名は仮名に変更させて頂きました。

「どこにあっても心は一つ」—青木辰男さんへのメッセージ 「こうやってどんな場所にあっても、私たちはつながっています」

四月十六日、大阪で「ジェネシスプロジェクト研鑽」のご講義を終えられた先生は、いつものように、帰京の飛行機に間に合う出発時間ぎりぎりまで会員の方々との出会いを重ねてゆかれた。そして、空港へ向かう車中では、九州本部の豊心層会員、^{あおき たつお}青木辰男さんへのお手紙（メッセージ）をビデオに吹き込んでくださった。

青木さんは、現在、「四聖日の集い」を中心に研鑽されている会員の方で、ホーム（老人福祉施設）に入所されている。「ジェネシスプロジェクト研鑽」が始まる前、まだお体が元気な頃は、九州本部の事務所で熱心にプロジェクト活動をされていた。当時は、ワープロやパソコンが普及する前で、本部内の掲示文や本部からの案内文も、全て手書きの時代。字のきれいな青木さんは、そうした掲示文や案内文を作成するプロジェクトに入られていた。

そして、二〇〇四年七月、妻の宏美さんが実在界に帰られることになったのだが、その宏美さんが「夫が一人で残り、生活するのは、どれだけ大変なことでしょう」と心配され、先生に「先生、辰男のことをお願いいたします」と伝えてこられたのだ。

その、今は亡き妻の宏美さんのお気持ちを受け止められながら、先生は青木さんに語りかけられた。

「辰男さん、お体の方はどうですか。宏美さん亡き後、今、ホームの方においでになりますが、お一人で寂しくはないですか。私は、こうやって一緒に歩んできた皆さんと、人生の大切な締めくくりの場所を寂しく一人で生活するなどということは、本当に申し訳なくて、申し訳なくて、言語道断なことだと思っています」

先生のお声は震えていた。先生にとって会員のお一人お一人はかけがえのないご自身の家族—。そして、先生は、心眼に映る、ホームでの青木さんのお部屋の様子に触れられた。

「ホームのお部屋が見えますよ、辰男さん。もうあちらこちらに、ずーっと私の本や写真を置いて下さってね、お一人なのににぎやかね。、……こうやってどんな場所にあっても、私たちはつながっています」

さらに先生は、老いの意味や青木さんの人生の意味について明かしてゆかれた。

「ホームと GLA の場所は少し離れて寂しいけれど、それでも心は一つ。肉体的にも、つらい日もおありでしょう。年を取るって、今まで頂いてきた体の力を全部返すことだから、つらいことですね。でも、逆に、自然に当たり前に動かしていた腕や足や腰の一つ一つは自分の体だと思ってきたけれども、生かされてきたんだなって一生きることってつらいし、生きるってすごいことだったなって（実感することができます）……魂願とカルマを持って現象界に飛び出して、受発色して生きるために生まれてきの人生だった（思い出すことができます）。

辰男さん、いくつかの願いがあったけれども、辰男さんが今世、求道者として生きるっていう約束は果たせましたね。「わしの人生、何だったのだろうか」ではなく、求道者として生きるっていうことは、一つ一つ形になって、魂願は成就しましたね。ありがとうございます。」

そして、先生は、体調が優れず、「善友の集い」に参加できなかった青木さんのために、「菩薩の祈り」の一節を祈り、青木さんに届けてくださったのだ。

3 押し上げる力の結集

私は、上述の GLA 誌 2006 年 6 月号の記事を拝読した際、「この記事は GLA 共同体が老人ホームを運営することが呼びかけている」と感じ、同年 7 月、この記事を参照しつつ、老人ホームの建設を進言するお手紙を総合本部の責任ある方にお送りさせて頂いたことがあります。しかし、後年、「老人ホームのみでは足りない」ということに気づきました。それは、老人ホームの建設には相当の期間が必要であると思われること、老人ホームが完成したとしても入居の条件が整わない方がおられるはずであること、および高齢者ではない病気の方などにも配慮が必要であると思われたことによるものです。

これらの問題に同時に解決の道を付けてゆくためには、高齢者や病気の方などの自宅等に四聖日などの映像を配信する以外に方法は無いものと思われました。そこで、2008 年 3 月、会員の自宅等に映像を配信するシステムを整えて頂けるようお願いするお手紙を、上述の方に差し上げました。翌 2009 年、希望した通りの映像配信システムが完成しましたが、希望した目的のためには全く使われず、愕然としました。

これまで私と同じように考え、私と同じような行動を取られた方が他にもおられたかもしれません、それは少数派の意見に過ぎず、これによって「総合本部の方針」を変えることができなかつたということだと思います。

但し、上述しましたことは過去の話ですから、総合本部の実情に変化が生じているかもしれません。つまり、従来よりも柔軟な形で方針の変更が可能になっているのであれば、何名かの会員の方々が連名で要望書を提出して下されば、上述のヴィジョンは実現に向かうのかもしれません。

一方、総合本部の実情に変化が生じていない場合には、数名程度の方々が要望されても、上述のヴィジョンは実現できないのではないかと考えられます。しかし、「押し上げる力の結集」を果たすことができれば、ヴィジョンは実現させることができるものと考えます。

すなわち上記ヴィジョンに賛同される多くの方々の署名を集めて、「会員の皆様の世論」を示せばよろしいのではないでしょうか。「多くの」とは最終的に何人になるのかは解りません。もしかすると数十人程度の署名で実現できる

かもしれませんし、数百人、数千人の署名を集めることが必要になるかもしれません。

しかし、GLA 全体の世論がその方向に結集されてゆくならば、誰しもその世論に逆らうことができなくなるでしょう。そこで、志ある方々には、他の会員の皆様にお声がけして頂き、映像配信システムが本来の用途のために使われるよう、ぜひご尽力をお願いしたいと思います。

4 引き上げる力との響動

「高齢者や病気の方などの自宅等に四聖日などの映像を配信する」というテーマは、上述のように内容についてあまり議論することがないため、「押し上げる力の結集」を果たせば、道は付いてゆくのではないかと考えます。

しかし、他のテーマについては、同じように進めることは難しいのではないかでしょうか。つまり、他のテーマは、議論を重ねながら「先智慧→実行→後智慧」のサイクルを回して青写真にアクセスしてゆくことが必要であり、職員の皆様には、そのためのコーディネートを果たして頂く必要があるのではないかと考えられます。

すなわち、在家の会員の皆様の「押し上げる力」と職員の皆様の「引き上げる力」が響動することによって、初めて他のテーマを進捗させてゆくことができるのではないかでしょうか。このように、職員の皆様の働きは大切であり、特に総合本部長は、全体を統括する重要な働きを担う役職になります。

もし、職員の皆様の中に、その任にふさわしくない方がおられますと、混乱や停滞の現実が生じてしましますので、事前にその任から外れて頂くような対策も必要ではないかと考えます。

以上